母親たちの家族再構築の試み

——「不登校」児の親の会を手がかりにして——

松 本 訓 枝

要 約

家族危機において意志決定の統一体として捉えられがちであった集団としての家族を、母親という個人の視点から検討する。本研究の目的は、母親が親の会で学習することによって、わが子の「不登校」にいかに対処し、夫との関係性をどう意味づけるのか、その過程を通して家族内の関係性を明らかにすることである。その結果、母親たちは親の会へ参加することを通して、「不登校」とは過度に競争を強いる社会や今日の教育制度への異議申し立てであると学習し、否定的子ども観から肯定的子ども観への転換を行っていた。また、夫がわが子の「不登校」を肯定的に捉えるか否かによって、夫との関係性を肯定的に捉える傾向と否定的に捉える傾向が明らかになった。そして、これらの関係性の変容と同時に、母親たちは反省的に過去の生き方を振り返り、新たな「自立」への道を模索している。

キーワード: 「不登校」、対処、関係性の変容

2004, 家族社会学研究, 16(1): 32-40

The Mothers' Attempt of the Reconstruction of Family Relationships ——through the Parents' Association of the “Futoko” Children——

Kunie Matsumoto

Abstract

This paper aimed at examining the family, which has been considered as a unit of decision-making, in family crises from the perspective of the individual mother. The focus of this research is to clarify the relationships in a family through the examination of the process how mothers cope with the “Futoko” of their children and how they define the relationship with their husbands based on the mothers' learning at the parents' association for the “Futoko” children. The findings showed that the participation at the parents' association enabled the mothers to learn that the reasons of the “Futoko” are the society's excessive competition and the objection to the present educational system. So their mothers' views were changed from the negative to positive towards their children's “Futoko”. Moreover, it is clear that they understand the relationships with their husbands according to their husband's positive or negative judgments on their children's “Futoko”. With this transformation of relationships, the mothers turned round their past ways of lives retrospectively, searching for an alternative way to be “independent”.

Key words: Futoko, coping strategy, transformation of relationships

2004, Japanese Journal of Family Sociology, 16(1): 32-40

I. はじめに

子どもが「不登校⁽¹⁾」になったと認識した母親たちは、一様に孤立感と疎外感情を持つようになる。

もうパニックで。夫に対して、子どもがこんなふうになって申し訳ない。うまく子育てできなくて。この子、学校へ行かなかったらどうなるのか。学校は行くものでみんな行っている。当たり前と思っていたのに、そうじゃない状況に置かれた自分。(自分が) 生きている土台からはみ出した感じがあった。[2001年9月22日Aさん(54歳・専業主婦)への1回目の聞き取りから。なお、聞き取りデータ内の()は筆者の補注であり、以下同様]

彼女たちは、家族内であれば夫や舅姑または親戚から、家族外であれば学校教師や近所から、自分に向けられるまなざしによって、自分を「ダメな母親」「〈不登校〉に至らしめた母親」として、負のラベルを付与していく。彼女たちはこのいったん付与されたラベルを、人は誰しもが自分に付与された汚名を返上しようと試みるように、このスティグマを返上していく試みに出ていく。

ただし、「不登校」などの問題が家族に持ち込まれた場合、これまでの家族危機に関して分析される家族は、集団としての家族であって、家族成員の意志は統一的・一体的なものとみなされがちな点で限界がある(神原, 2000)。そこで、本稿では、「不登校」という事態に、一家族員である母親に限定して、母親がいかに対処したのかについて、その他の家族員に対する意味づけの仕方から、検討を試みるものである。

II. 枠組みの設定: 母親たちの存在証明という視角

これまでの「不登校」児家族の研究を時系列的に概観すれば、原因としての家族と、治療される対象としての家族⁽²⁾の2つに大別される。

若林ほか(1965)と青山ほか(1975b)は、母親の過保護や溺愛が「不登校」児本人のパーソナリティの未発達に影響を及ぼしていることを指摘した。高木は、家庭内には子どもの居座りを許容する条件が存在するとして、家庭内での父親不在に原因を求めている(高木ほか, 1965: 高木, 1977)。これらの研究では、性別役割の過度な徹底が「不登校」を招来するという点で共通しているが、なぜ家族が原因とされるのかという疑問が呈せられることなく、家族を所与の存在として位置づけている。1980年代に入ると、「不登校」家族の研究は、家族療法に代表されるように、家族を治療することで家族内の機能不全を解消し、いわゆるより良い家族へと改善していく試みが行われた。家族内機能の回復による、「不登校」に対する治療が開始される。先に大別した2つの家族は、原因を追究し、その原因を除去するように治療していくという点では、「不登校」を家族内の機能不全の問題として取り上げ、その点では同一の視点を共有している。しかし、このように家族を原因として取り上げて治療するという傾向は、最近において家族を支援する立場からの研究も見られ始めている。そして、その支援システムの1つとしてセルフヘルプ・グループとしての不登校児の親の会の意義についても明らかになっている(小野, 1993: 松本, 2001, 2003: 山田, 2002)。しかし、これまでの研究では親の会で生成される学習や対処戦略については明らかにされているが、会での対処戦略が家族内に持ち込まれた場合に、いかなる効果を及ぼすのかについて検討されていない。それは同時に、家族危機において親の会をソーシャル・サポート・システムとして位置づけた場合、個々人によって学習された対処様式が、いかに家族内にもたらされるのかについて検討が十分になされていない点である(神原, 2000)。

「不登校」などの子どもに関わる問題では、親は子どもを保護する対象とみなされ、親の責任が強調される。公私の分離という近代家族の特徴から

子育て＝母親役割と仮定され、子どもの問題は母親の問題とされる。こうした状況において、母親たちが自分に付与されるスティグマをいかに払拭しようと試みるのか、自己の存在証明について、石川の論^③を参照したい。ここで言う存在証明とは、人が価値あるアイデンティティを獲得し、負のアイデンティティを返上しようとして、日々あらゆる方法を駆使することである（石川、1996）。母親たちに付与されたスティグマを、親の会において学習される対処戦略によって新しい認識枠組みへと変容させ、その変容が他の家族員に対する意味づけの仕方へどのように影響するのかについて、母親たちの存在証明という視角から描くことができる。これまでの家族研究において、家父長制の名の下にあった従属するものとして少なからず見なされていた女性＝母親を、家族内の一個人、独立したものとして捉える。それは、これまで原因＝治療される対象として見なされがちであった家族を、家族内の一個人の対処様式から見ることで、一個人の視座から家族内の関係性を捉えることでもある。この視座から、「不登校」児の親の会での学習は参加者個々人にいかに内面化され、その学習効果が母親から見て家族内にいかに影響を及ぼしているのかを明らかにすることができる。ここに、親の会を取り上げる意義がある。

したがって本稿では、母親を対象として家族内部での彼女らの主観的意味世界から「不登校」への対処過程や家族再構築の試みについて、親の会を媒介に明らかにしていく。具体的には、母親が子どもへの認識をどのように読み替えていくのか、さらにこれを読み替えることによって、夫婦の関係性がどのように構築されていくのかを明らかにしていく。すなわち、個人の視点から「不登校」問題に関わる家族内の関係性を明らかにすることで、家族危機への対処戦略を描いていくことが本稿の目的である。

III. 調査手続き

1. 親の会：登校拒否を克服する会の特徴

全国には不登校に関連したさまざまな親の会があり、親たちはそこで何らかの子どもへの対処を学習している。例えば、親が中心になって運営している会や公的な研究機関、病院などに附属したものから、宗教団体や政治団体と関係した会まで、その運営基盤は多岐にわたる（西條、1988）。したがって、会の方針の違いによって子どもへの対処の仕方にも相違が見られる⁽⁴⁾。

本稿で取り上げる登校拒否を克服する会（以下、克服する会）の特徴については、以下のとおりである。

- (1) 1986年に、大阪教育文化センターの援助をもとに親たちによって組織される。
- (2) 教職員組合の援助を受けている。
- (3) 全国各地にある親の会などをつなぐ事務局を担当している。
- (4) 名簿登録数は約680～800名である。

本稿で克服する会を取り上げた理由は2点ある。第1に「不登校」児の親の会が各地に組織化され始めたのが1980年代後半からであり、「不登校」児の親の会としては初期に出来上がり、その意味ではある程度の歴史性を持ち、「不登校」についてある程度一貫した共通の認識が形成されていると考えたことである。第2に、教職員組合との連携体制のもと資金面での援助を一定程度受け、組合の教育運動にも参加していることや、全国にある親の会をつなぐ事務局を担当し、名簿登録数は約680～800名であることからして、かなりの程度組織力のある会であると想定したことによる。

2. 調査概要

克服する会へ参加する母親20名に対して2001年9月10日～11月10日に実施した聞き取りデータとフィールド・ノーツ⁽⁵⁾を基にしている。母親の年齢は40代が7名、50代が13名であり、隔月に1回開催される交流会の運営方針な

どに関わっていることから、世話人と呼ばれている人々でもある。したがって、本稿の対象者は会へのコミットメントが強い人々であると推察される。

現在の子どもの状態については、「不登校」から何らかの進路を歩み、おおよそ 20 代前半から後半の年齢に達していることから、母親たちはわが子の「不登校」当時のことや家庭内のことをある程度客観視して語りうると考えられる。

本稿において、克服する会が「不登校」問題に対していかなる対処力を持つのかを明らかにする上で、世話人を対象とすることは、会の保持する特性や趣旨をよく理解しているからこそ、ここから明らかにされる知見によってより強く会の特性が反映されると考えられ、その意味では適切な対象であると考えたことによる。

なお、本稿に記載する登校拒否を克服する会の名称と、調査対象者への調査に対する趣旨説明及び聞き取りデータの公開については、各関係者の同意を得た上で掲載している。

IV. 母親たちの家族再構築の試み

1. 子どもへの認識の変化

B さん（53 歳・専業主婦）は子どもが学校へ行くことを嫌がり始めてからのことについて、過去を振り返りながら以下のように語っている。

（子どもが）「学校へ行きたくない」と言うが、なぜかわからなくて。（子どもが寝ている）布団を引きはがしたり、好きな漫画本を全部取り上げたり。・・・・・・あの子は私と性格が違い、「私が我慢すれば丸く収まる」と思っていたようで、今まであまり自分の感情を出さなかった。そういう、あの子の良いところ、優しさが見えるようになってきて、あの子に気を使うようになった。それまでは「この子は、なんでとろいのか」と思っていた。上の姉がいい点数をとってきていたので、「勉強ができて当たり前」という気持ちがあった。[2001 年 9 月 25 日 B さんへの 1 回目の聞き取りから]

B さんの例に見られるように、母親たちは自分の意のままに子どもを動かしたい思いがあったことを反省的に語る。世間の価値規範に従順であろうとすればするほど、わが子の「不登校」はあってはならない行為と捉えられ、母親自体を追い込んでいく。しかし、そのような苦悩は B さんのように、子ども自身の良いところを見ていこうとする姿勢へと変容したと言う。それは、C さん（49 歳・保育士）の語りからも読み取れる。

それぞれ自分の人生やから、夫も私も子どもも。生きてて良かったと思える生き方ができたらしいな（と思っている）。（自分の生き方の良い・悪いを）誰かと比べられるものではないし、そう思ったらすごく楽になった。[2001 年 9 月 30 日 C さんへの 1 回目の聞き取りから]

子どもと自分を異なる存在として位置づけ、子どもに向けられた学歴などの価値基準を払拭し、自分のなかでの価値を重視しようとする姿勢へ転換したと、過去を振り返りながら語る。子どもを周囲の価値規範でもって見ることから、夫や自分そして子どもを含めて自身が生きたい方向で生きていくことを重視するようになったと言う。母親たちは子どもの「不登校」によって、自分も子どもも以前のような生活はできない、自分はダメな人間だと思ったと当時を振り返る。しかしそう思ったとしても、生きていくためにはその負の価値を読み替えていくことが求められる。そして、そのような読み替えは存在証明という形で母親によって示される。

克服する会では、「不登校」に至る根本的原因が競争主義的な社会や教育にあるとし、子育てもそのような社会の影響を受けていると考えられているので、母親の養育責任を直接的に問題としない（大阪教職員組合・大阪教育文化センター、1989）。この原因を直接的に母親に帰属させないことが、会において終始一貫した考え方である。「不登校」の原因を社会や教育という大きな物語へと読み替え、それによって母親たちは自己の子育てへの批判をこの場では追及されることなく、

「不登校」という共通の問題を持っているもの同士で、わが子への対処を様々な意見の中から取捨選択していくのである。こうして、わが子の「不登校」という負のラベルに新たな価値を与え返そうとする実践が行われている。

ここは私を否定することなく、私の話を聞いてくれる場。それまでは、どこの相談機関に行っても私の子育てが悪いと言われて。[2001年10月2日Dさん(57歳・専業主婦)への1回目の聞き取りから]

Dさんの子育てを否定せず、共通の問題を持った者同士がお互いに悩みを聞くことやわが子よりも大変な状況にある子どもを知ること、「不登校」になったわが子に対して注がれていた「変わった子」「ダメな子」という母親のまなざしが、「うちの子は決して変わった子ではない」という認識へと読み替えられたと言う。会でわが子の状況を話すことによって、また同じ境遇の参加者の話を聞くことによって、母親たちはわが子を相対化して位置づけられるようになる。克服する会は、わが子の「不登校」という共通の問題をもっているがゆえに、自己と他者を同じ立場に置くことができる。また、これまで周囲から母親に帰せられていた養育責任を会では追及されることがなく、その点で、克服する会は母親にとって自己を防衛するための機能、居場所としての役割を保持している。

会では子どもたちは過剰なストレスを抱え、「不登校」に至るということや子どもの最大の援助者は親であるという考えのもとに、親が子どもの立場にたって、子どもを受け入れることを第1に求めている。ここでは親が子どもをいかに受容し、「不登校」の子どもを周囲の圧力からいかに守るかが強調される(大阪教職員組合・大阪教育文化センター1989)。「不登校」とは社会や今日の教育制度が過度に競争を強いることへの異議申し立てであり、社会への警告であるとする⁽⁶⁾。このことによって、子どもが「不登校」によって社会に異議申し立てをしていると解釈し、さらには

この解釈が彼女たちのこれまでの生き方、「言いたいことを言わずに、我慢してきた自分」「人の目をうかがって良い子でしようとした自分」、こういった自分を再帰的に回顧していく契機を用意することとなる。「不登校」とは既存社会に対する警告であると解釈すれば、わが子の「不登校」は社会への戦いであるとも認識され、その結果、子どもを受容しやすくなる論理が構成されることとなる。そして、このようにわが子は社会と戦っていると見ることで、母親自らがこれまでどのように生きてきたのか、自分は社会に従順に生きてきただけであったと意識化していくことになる。そうした読み替えによって、彼女たちは子どもを受容し、子どもの立場にたって考えていこうとする。そして、「不登校」という一行為は子どもとともに母親も「自立」していこうとする試みとして解釈されていくのである⁽⁷⁾。

長男はバイト、長女は家事手伝い、次男は昼夜逆転で、今の子どもの状態を前の私では堪えられなかったと思うんです。だけど今は、子どもが迷いながらやっていたことがすごいなぁと思います。自分にはなかったところやから。[2001年9月25日Eさん(49歳・専業主婦)への1回目の聞き取りから]

このように、彼女たちがわが子のことや自分のことについて過去を反省的に問い直す作業は、決して生半可なものではない。なぜなら、約40年あるいは50年かけて構築してきた自分の人生を批判的に受けとめることは、ともすれば、自己喪失へと至ったとしてもおかしくはない苛酷な作業だからである。Eさんのように過去を問い直し、新たな価値を構築していこうとする実践は、昨日まで信じこんでいた価値体系を根本から否定して組み立て直そうとする困難な方法である(石川、1996)。ある母親は、会以外の人と話をすると価値観が違っていて話が合わないと言う。また、ある母親は会において学習した自分なりの生き方と既存の価値体系の中での葛藤を語る。しかし、そうした葛藤はあっても、母親たちはいったん手に

入れた新たな認識枠組みの中で、「自立」への道を模索している。そして対社会との葛藤状況を、克服する会へ参加することで緩和させているとも見える。さらに言えば、昼夜逆転、家から一步も出ない、自室への閉じこもりなどの子どもの状態を目の当たりにし、その事態への対処がわからないままの彼女らにとっては新たな認識枠組みでもって対処しなければどうすることもできないとする追いつめられた状況にあり、克服する会での学習を拠り所とするまで母親たちの状況が追い込まれていることも、一方で示唆されている。

2. 夫への認識の変化

では、このように子どもや自分のこれまでの生き方を反省的に回顧することで、母親たちは子どもの父親である夫との関係をどのように構築していったのであろうか。

夫とともに自営業をしているFさん（50歳・自営業）は、仕事のことも家庭の中のこともすべて中心になって行っていた。夫は「時間が解決する」というマイペースな性格であり、店の経営や子育てに対して夫に協力してもらうことに対してあきらめがあった。そのような中で長男が「不登校」状態になり、初めは学校に行かないこと自体を理解することができず、近所の目や同居している実母の手前もあり、「この子を憎む以外に生きていくことができなかった」と語る。その後、Fさんは種々の相談機関を巡りながら、克服する会へ参加する。そして、その後の夫との関係についてこう語っている。

最初、お父さんにひかれたのは温かさやったんやけど、（私の）母と（一緒に）仕事をする中で、（夫を）頼れないと思って。母と私で店のこと、子育てのことをやっていた。・・・・・・でも、大輔（仮名、Fさんの子）が「不登校」になってからはお父さんが歩んできた生き方もいいんじゃないか。自然体で生きること。無理しなくてもいいんだという生き方もあるんだと思うようになった。[2001年10月23日Fさんへの2回目の聞き取りから]

子どもに対して、会では「信じて・任せて・待つ」ことが言われる。ここでは、その会の方針と、Fさんの夫の生き方は重ね合わせて見ることがができる。夫は時折、「俺の子やから、しょうがないんや」とFさんを励まし、決してFさんの子育てを責めなかった。しかし当初Fさんは、その言葉に対して周囲の目もあり、腹立たしくあったようである。しかし会への参加を契機に、これまで実母に従順であった自分、「困らないように先手を打って生きていこう」としていた自分は気が負っていたことに気づき、学校に行かないわが子を受け入れようとしていったと言う。自分なりのペースで歩んでいる夫の生き方は、これからFさんの目指す生き方でもあり、それによって、新たな夫婦の関係性が構築されようとしている。

ただし、これらの学習を通して母親たちが世間体を気にしない「自立した個人⁽⁸⁾」を目指すことは、すべてFさんのように家庭内で進展していくわけではない。

子どもに問題があったときは、一緒に乗り越えてくれるものだと思っていたのに。夫は私に「子どものことは、あなたに責任がある。あなたが悪いんだ」と言うだけで。娘にはズーッと「学校へ行け」と言うし。娘の「登校拒否」より、夫婦の問題になった。[2001年9月25日Eさんへの1回目の聞き取りから]

子どものことについて理解してもらおうと思っても、夫は受け付けない。会社という一組織の中で、世間の常識のもとで生きている夫と世間の常識から解放されようとする妻とのズレが出現している。母親は、自分のこれまでの生き方を否定してまでもわが子を理解しようと必死であった。しかし他方、父親にはなかなかそれが理解してもらえない。会社という社会で生きている父親にとって、子どもが何をするでもなく家にいることは怠惰な行為であり、既存の社会から逸脱した行為とし受け取ることができず、また母親の養育責任として責め立ててしまう。ここに、母親が親の会で培った新たな価値体系と父親の既存の価値体系

との闘争が出現する。また、それは家族機能が内包した矛盾、すなわち生活保障集団と心理的・情緒的結合機能の矛盾が顕在化されている状態でもある(木田, 1994: 山田, 1994)。そして、夫婦の子どもへの理解が大きく乖離し始めたとき、母親たちは夫との関係性を断念していったと言う。

以前は夫が私の子育てに干渉しないことが、せめてもの協力と評価していた。しかし、しんどくなることもあって、(夫に) 協力してと思っても協力してくれない。だから夫との関係を (あえて) 切っていった。(そして) その分、子どもにエネルギーを向けようと。可能性のないものにエネルギーを向けることが無駄と判断した。子育てに夫を巻き込むエネルギーがなかった。[2001年9月22日Aさんへの1回目の聞き取りから]

Aさんにとっては、子どもの「不登校」にいかに対処していくのかに必死な状況下で、理解してもらえない夫に余分なエネルギーを傾けることは非生産的な行為であった。こうして、夫との関係性の修復が不可能であると認識した場合、彼女たちは家庭内別居や離婚という道を歩みながらも、わが子の「不登校」に対して必死に対処しようとしていった。

母親たちは、「なぜわが子が・・・」「うちの子にかぎって」と子どもの「不登校」を認めたくない。ある母親は登校時間になり、「他の子が学校へ行っている姿を見ると、たまらなくなつて」と語る。また、親子心中まで考えていたことを語る母親もいる。

会へ参加していなかったら、今頃どうなっていたか。殺人事件を犯していても不思議ではなかった。[2001年10月2日Dさんへの1回目の聞き取りから]

彼女らにとって「不登校」とは、世間の目を過剰に気にしてしまう事態であり、ともすれば生存の危機にまで至ることもある。しかし、これが会において子どもに寄り添い、子どもを守る母親へと転換することで、彼女らは自己の「自立」も含めて、今を主体的に生きていこうとする。そうで

あるからこそ、新たな認識枠組みでもって生きていこうとする妻と夫との関係は、わが子の「不登校」を受容するか否かというバランス上に成立されていくと思われる。夫が子どもを受容し、妻の子育てを批判しなければ夫の存在を認め、新たな関係性が構築されていく。しかし、夫がそのような態度を取らなければ親子関係と夫婦関係の明確な境界が顕在化し、子どもを中心にすることで、夫は付属的地位へと押し下げられることもある⁽⁹⁾。ここに、わが子の「不登校」という事態に、母親が子どもを理解することに努めた場合、夫との間で既存の価値体系に対する闘争が展開されていくことになる。

V. まとめ

これまで見てきたように、母親たちは克服する会への参加を通して、子どもに対して抱く「ダメな子」という認識から、個々の子どもが持っている特性に即して見ていこうとする姿勢へと変化したと語る。つまり、否定的子ども観から肯定的子ども観への転換が図られる。また、その変化の過程においては母親自らも反省的に過去の生き方を回顧し、新たな「自立」への道を模索していた。そして、このような価値規範の変化が夫との関係性をも変化させていく契機となっている。

母親たちは、子どもに対する最大の援助者が親であることや、子ども達が今日の競争主義的社会のもとで「不登校」という形で人間の存在に対して警告を発していることを学習する。それは母親たちにとって、これまでの自分の生き方への問いとなって、立ち現れてくる。「不登校」を今日の社会に対する警告であると見た場合、彼女たちはこれまでの自分の生き方がいかに社会の価値規範に従順であったのかとこれまでの自分を否定し、新たな自分、すなわち「自立した個人」へ向けての新たな模索を始める。そうしなければ子どもを受容することは困難であり、また母親たちの子どもを「不登校」にしてしまった意識⁽¹⁰⁾からの解放は得られない。母親と子どもに負わされた「不登

校」という負の価値に価値を与え返そうとする実践、その試みは個々人を拘束してきた価値規範、既成の支配的な体系への異議申し立てとなって現れる⁽¹¹⁾。ただし、家庭内において母親たちの既存の価値規範からの解放は、いかに子どもを受容するのかに向けられる。そのため、これを阻止する既存の価値支配体系でもって子どもに接していこうとする夫（父親）に対しては激しい敵意に満ちた姿勢と、また夫へのあきらめとを生じさせることがある。近代家族の特徴とされる子ども中心主義は、克服する会において「不登校」状態にある子どもを受容することを通して、より強調される。子どもへの過剰な配慮でもって家庭内は展開されていく。つまり、夫婦関係の基盤は子どもにあり、子どもを介在にして夫婦間のコミュニケーションが不可能になれば、この関係がいつ破綻してもおかしくない状況に追い込まれていく⁽¹²⁾。さらには、既存の価値規範からの解放、「自立した個人」を追求している彼女らにとって、既存の価値規範から成立している夫婦関係は、夫が既存の価値規範に対して柔軟でない限り、さらに解体を促進することにもなりかねない。ここに、新たな価値体系でもって生きていこうとする妻と、既存の価値体系でもって子どもに対処しようとする夫との闘争が顕在化する。

本稿では母親という個人の視座から、家族危機への対処戦略や意味づけの仕方について描くことで、母親から見た家族内における関係性、母親の認識の変容を捉えることが可能となった。ただし、親の会へ参加せずに個々人で対処を行っている親たちについて明らかにすることは、今後の課題である。また、本稿で取り上げた克服する会は数ある親の会の 1 つであり、会の性格は個々に異なるため、この知見をもって全体を言うことは不可能であるが、母親たちが「不登校」に関わって家族内で展開する対処様式の 1 タイプとしての妥当性は持つと考えている。

なお、本稿では母親のみに限定して不登校に関わる対処様式について明らかにしてきたが、父親

や「不登校」児たちの対処様式についても明らかにすることによって、個々の家族員の視座から家族内の関係性を捉えることも今後の課題とした。

【付記】

本稿は、第 13 回日本家族社会学会（2003 年 9 月 7 日、大阪市立大学）での報告原稿に、加筆・修正したものである。

【注】

- (1) 学校に行かない状態について、神経症や非行・怠学といった様々な分類があるが、このような分類は子どもの状態をどの過程で判断するかによって様々に異なり、またそれを判断するのに主観的な要素が多分に関連してくることから、学校に行かないことをすべて含めて「不登校」という言葉で統一する。
- (2) 川中（1996）の先行研究から、筆者が分類したものである。
- (3) 石川は対処戦略として「印象操作」「補償努力」「他者の価値剥奪」「価値の取り戻し」という 4 つに類型化している（石川、1996）。なお、本稿の目的が親の会の学習がどのように家族内に持ち込まれるかを明らかにすることにあることから、石川の「価値の取り戻し」に焦点化して分析を行う。
- (4) 子どもに対して再登校を促すか否かによって、対処の仕方が大きく 2 分されている。
- (5) ここでの聞き取りデータは、会話を記録したフィールド・ノーツを基にしている。母親 20 人に 1 回の聞き取りで要した時間は 2～3 時間であった。これを日を変えて計 2 回行った。また、克服する会で行われる世話人会や 2 ヶ月に 1 回開催される会合に 1997 年から現在まで参加した内容も含まれる。
- (6) 克服する会では子どもたちは学校へ行きたくても行けない状態にあるとして、意図的に登校を拒否しているという観点から「登校拒否」という用語を使用している。
- (7) 克服する会における母親たちの「自立」については、会の世話人である松居がまとめている（松居、1995）。
- (8) 隔月に行われる親の会の事前打ち合わせは、世話人が集まって行われる。そこで、世話人の人

- たちから時折耳にするのがいかに「自立」していかである。それは、それ以外のインフォーマルな場（お酒の席や喫茶店など）でも聞かれる。いかに主体的に生きていくかの現れであろう。
- (9) 近代家族の特徴である子ども中心主義（落合, 1989）が、家庭内においてより強く顕在化していく。
- (10) 松本（2003）を参照されたい。
- (11) 石川は障害者を例に、障害に対して付与される負の価値が、「障害は個性だ」「ありのままの自分を肯定しよう」という志向へ転換することによって、価値を取り戻していくことを指摘している（石川, 1996）。
- (12) 山田は現代の夫婦関係の脆弱性について、愛情の側面から指摘している（山田, 1994）。また、本稿で明らかになった知見は、例えば障害者を持つ家族においても類似することである。障害児を持つ家族においても、夫が子どもを受容するか否か、また妻に対して子育てへの協力をするか否かによって、夫婦関係は大きく左右される（土屋, 2003）。
- 【文 献】**
- 青山むつこ、浜岡久美子、平井文子、小池恵美子、小山なおみ、野呂淳子、上床和歌子、山崖俊子、吉岡寿子、平井信義、1975b、「登校拒否の発生機序について（第Ⅱ報）」『小児の精神と神経』15(3): 131-140.
- 石川 准、1996、「アイデンティティの政治学」井上俊、上野千鶴子、大澤真幸、見田宗介、吉見俊哉編『岩波講座 現代社会学 15 差別と共生の社会学』岩波書店、171-185.
- 神原文子、2000、「家族社会学からみた家族危機」清水新二編『家族問題：危機と存続』ミネルヴァ書房、193-217.
- 川中淳子、1996、「登校拒否の家族に関する文献展望」『広島大学教育学部紀要』（広島大学教育学部）、45: 171-176.
- 木田淳子、1994、『家族論の地平を拓く：競争社会、性別分業、〈母性〉』あゆみ出版.
- 松居公子、1995、「おうた子に教えられて」高垣忠一郎、藤本文郎、横湯園子編『登校拒否・不登校 第2巻 中学生』労働旬報社、158-172.
- 松本訓枝、2001、「〈不登校〉児家族の変容とセルフヘルプ・グループの役割（第1報）：〈親の会〉参加後の子どもと親の変化の実態」『生活指導研究』18: 138-157.
- 松本訓枝、2003、「母親が語る 〈不登校〉 問題と対処：〈親の会〉における学習と相互作用過程」『市大社会学』（大阪市立大学社会学研究会）、4: 63-80.
- 落合恵美子、1989、『近代家族とフェミニズム』勁草書房.
- 大阪教職員組合、大阪教育文化センター「親と子の教育相談室」編、1989、『〈登校拒否〉を克服する道すじ：相談においでの方のために』大阪教職員組合、大阪教育文化センター「親と子の教育相談室」.
- 小野 修、1993、「不登校児の親の変化過程仮説：パーソンセンタード・アプローチ」『心理臨床学研究』10(3): 17-27.
- 西條隆繁、1988、「父母の会としての取り組み」神保信一、山崎久美子編『現代のエスプリ 250 学校に行けない子どもたち：登校拒否再考・』至文堂、132-141.
- 高木隆郎、川端つね、藤沢淳子、加藤典子、1965、「学校恐怖症の典型像 (I)」『児童精神医学とその近接領域』6(3): 146-156.
- 高木隆郎、1977、「登校拒否の心理と病理」『精神療法』3(3): 218-235.
- 土屋 葉、2003、「〈障害をもつ子どもの父親〉であること：母親が語る/子どもが語る/父親が語る」桜井 厚編『ライフヒストリーとジェンダー』せりか書房、119-140.
- 若林慎一郎、伊藤秀子、伊藤 忍、1965、「学校恐怖症または登校拒否児童の実態調査」『児童精神医学とその近接領域』6(2): 77-89.
- 山田昌弘、1994、『近代家族のゆくえ：家族と愛情のパラドックス』新曜社.
- 山田哲也、2002、「不登校の親の会が有する〈教育〉の特質と機能：不登校言説の生成過程に関する一考察」『教育社会学研究』71: 25-45.